

グループ活動紹介

リョービ(株)における活動

リョービ(株)
寶山 靖浩

Group
Activities

1. はじめに

リョービでは、2002年ごろから、本格的に品質工学の活動を始めた。パワーツール、ダイカスト、印刷機器の技術者の有志が品質工学の評価技術を取り入れてきた。

リョービは、現在、ダイカスト製品を扱うダイカスト本部とパワーツールを扱う住建機器本部、建築用品を取り扱う建築用品本部がある。また、印刷機器事業は、2014年より三菱重工印刷紙工機械(株)と合弁会社となり リョービMHIグラフィックテクノロジー(株)となった。

2. リョービでの活動のはじまり

1999年、パワーツール事業の技術者である守本が、広島市工業技術センターの機能性評価研究会(現：広島品質工学研究会)に参加してから本格的に活動がはじまった。このとき研究会での成果が論文¹⁾である。リョービが品質工学を適用して論文にまとめた最初である。

それから、2002年には、パワーツール事業の技術者である田頭らから、ダイカスト事業の技術者に品質工学が紹介された。筆者の所属するダイカスト事業を行うダイカスト本部では、このときから活動が始まった。当時、有志20人近くがこの品質工学の適用のための活動に参加した。2つのグループに分かれて1テーマずつ合計2テーマを選定した。ダイカスト金型とダイカスト鋳造に対して品質工学を適用する活動を行った。

そのころ、広島市工業技術センターの機能性評価

研究会では品質工学の研究会が活発に行われていた。マツダ、三菱重工などの大企業や県内の多くの企業がこの研究会に参加していた。まずは、そこで指導を仰ごうということになった。研究会では、講師として矢野宏が招かれていた。右も左もわからない状況ではあったが、ダイカスト本部から前記2テーマを研究会にもっていった。詳細にいうと、ダイカストの鋳造条件の最適化と金型の切削加工の最適化のテーマである。このころの機能性評価研究会は、出席者が多く、研究テーマも多かった。したがって、1テーマの研究相談時間が短かった。短い時間ではあったが、最初は講師に厳しい指導をうけたのを覚えている。叱咤激励されながらこの年に数回の研究相談で発表できるまでテーマをやり遂げた。次の年の研究発表大会で、パワーツールの研究と合わせると、リョービで3件のテーマを発表することができた。

その次の年から、印刷機器事業の技術者が品質工学の事例研究を始めた。機能性評価研究会への参加も同時に始めた。この年からパワーツール、ダイカスト、印刷機器とリョービの主要事業部の技術者が、品質工学での研究及び技術開発を始めた。このころ、品質工学の取り組みが社内で一番活発な時期だったと思う。

3. 継続活動

それからは、リョービとして、パワーツールの技術者とダイカストの技術者が広島市の機能性評価研究会に軸足を置き、毎年、技術的課題をもっていき研究を進めていった。下記文献の研究^{2)~11)}を行い